

明日のJFEを支える

人材力

～JFE世代の挑戦～

鉄を中核に、幅広い事業を展開するJFEグループ。

その品質は、社員一人ひとりの力が支えている。

2002年のJFEグループ発足から約14年。

世代交代が進み、グループ発足後に入社した“JFE世代”が増える中、

若き社員たちはどのような活躍をしているのか。



若きリーダーが担う 技能伝承

JFE スチール
東日本製鉄所(千葉地区)
設備部 冷延設備室 リーダー

布留川 卓也

「原因解明の際は、まず過去の補修が記録されている機械保全履歴という書類を調べます。前例のない不具合は、部下や上司と相談してベストな解決策を導き出します。難しい問題ほど、解決できたときの喜びも大きいですね」

技術を伝えるだけではなく 新たな方法を残していく

布留川がリーダーに就任したのは入社8年目のとき。ほかの製造業と同様、急速に世代交代が進む製鉄所では、積極的に若手を起用している。

「後輩に対して責任を負うのは初めてです。より良い工場にするためにも、知識を自分の中だけにとどめてはなりません。自分が覚えるのに5年かかったことを、後輩には1年で覚えてもらえるように努めています」

若くして現場を指揮する布留川も、かつては先輩から技能を教わる立場の人間だった。身をもって対処した不具合の数々が、現在の糧になっている。

「新人の頃、トラブルが生じるとすぐに先輩が駆けつけてくれ、『このトラブルはもう解決できる』と安心したのを覚えています。先輩はトラブル対処後に機械の図面を細かく見せて原



因を説明してくれました。問題の全体像を教えることで、自分の頭で考える力をつけてくれたのだと思います」

技術者が経験を積み上げても、機械は年月とともに新たな不具合を起こしてしまう。どんなときでも最良の解決策を見いだす力こそ、現場では重要なのだと布留川は語る。

「2TCMは稼働してから50年以上になりますが、過去の機械保全履歴は全て保存されています。これだけ伝統ある現場を任されている以上、自分も履歴に新たなノウハウを刻んでいかなければならない。さらに先輩として、より良い履歴をつくれる人間を育て上げていく。そうしてJFE全体の技術が積み上がっていくと考えると、大きなやりがいを感じます」。

伝承。

冷間圧延の工程で 生産の安定を守る

JFE スチール東日本製鉄所(千葉地区)。主要製品は、缶詰やシンクに使用される薄板。約3mmの鋼を10分の1の薄さに加工する、冷間圧延という技術でつくられている。この過程を担う冷間圧延装置(2TCM)の保全を担当する29歳のリーダー・布留川卓也は語る。

「冷間圧延はわずか0.1mmの誤差が品質を左右します。良質な製品を安定して生産し続けるため、装置を点検・補修するのが私の役割です」

2TCMの保全は3人一組のグループで行われる。リーダーを務める布留川は、2人の部下が記入した点検書類を綿密に確認していく。部下の1人は19歳の新入社員だ。

「2TCMは冷間圧延で世界最速の装置です。回転が速い分、消耗しやすいので、頻繁に補修する必要があります。機械の不具合は工場全ての工程をストップさせることにつながるため、迅速に原因を解明して処置しなければなりません」

不具合原因の誤認が操業停止につながり工場の運営に大きく影響することもあるため、保全リーダーに課せられる責任は大きい。

私たち統括の仕事は、それぞれの役職に適切な人員を配置することです。リーダーに求められるのは総合力。複数の人と機械を動かし、安全、品質、予算、納期に目を向けなければならない現場のリーダーは、視野の狭い人間では務まりません。リーダーの価値は、本人がどう動くかではなく、現場がどう動くかで決まります。全体を見て適切な判断を下す布留川のような人材が、今後工場を支えていくでしょう。

私たちベテランは若手に対し、将来JFEの中核として活躍することを見据えて指導をしています。そのためには、「どうする」という短期的な解決だけでなく、「なぜそうするか」という因果関係を理解してもらわなければなりません。時間をかけて議論を重ね、共に作業をすることで、現場への理解が深まるようにしています。そうして育った人材のアイデアは、新たな基準として永続的に活用できるものです。次の世代

へと受け継がれ、JFEのかけがえのない財産となるでしょう。

OBを含むベテラン技能者が専任講師を務め、職場ごとに指導に当たる「テクニカル エキスパート制度」などの試みも始まりました。若手が普段遭遇しないトラブルへの対処法を学ぶなど、新たな効果が期待できます。今後ますます技能伝承が活発になり、たくましい人材が育っていくために支援していきたいです。



将来JFEの中核を担う 技術者を育てるために

JFE スチール
東日本製鉄所(千葉地区)
設備部 冷延設備室 統括

吉田 輝夫



開拓。

スピーディーに商品を届け お客様との信頼を築いていく

JFE グループでは海外での現地ビジネスを推進するために、現地スタッフ（ナショナルスタッフ）の活用を進めている。ベトナムJFE 商事ハノイ支店には、4人のナショナルスタッフが勤務。それぞれが営業や事務で活躍する。その一人、ファム チュック クインは、原材料の営業担当だ。

「主な商材は日本産の鉄スクラップ。ベトナムの製鋼メーカーに販売しています。ビルやマンションの建設が進むベトナムでは、鉄スクラップの需要が高まっているのです」

既存の建築物の解体などによって発生する鉄スクラップは鉄鋼蓄積量の高い先進国が主な産出国であり、ベトナムが輸入する鉄スクラップの多くは日本産だ。

「バイヤーとサプライヤーの事情をヒアリングし、双方にとってベストな提案をするのが私の仕事です。鉄スクラップは供給量が不安定で、価格は日々大きく変動します。取引では常に最新の情報が求められるため、日本全国の拠点とグループチャットで連絡し合い、それを15分ごとにチェック。バイヤーにとって最適な原料を、最適な価格で届けなければなりません。お客様に満足され、それを日本のスタッフに伝えたときの達成感

日本と世界をつなぐこと。
それが、ナショナルスタッフの役目。



PROFILE

Pham Truc Quynh

ベトナムJFE 商事ハノイ支店営業担当。日本への短期留学、日系企業で通訳を経て、2011年入社。営業アシスタントとして事務職で勤務した後、営業担当。主に鉄スクラップ、合金鉄を担当。

世界でビジネスを拡大する グローバル人材

ベトナムJFE 商事ハノイ支店

営業担当

ファム チュック クイン

が、私のやりがいです」

流暢に日本語で話すクイン。2カ国の事情や文化・言語に精通するナショナルスタッフの強みが、新たなビジネス領域を切り拓く。

原材料の力を 自国の発展に役立てる

もともと日系のIT企業で通訳の仕事をしていた彼女は、より幅広い領域に挑戦しようとベトナムJFE 商事に入社した。

「事務職として入ったのですが、コミュニケーションが好きだった私を支店長が営業職に抜擢。スタッフの皆さんに市況や各指標の論理的な分析を教わって成長できました。メンバー同士が助け合う、とても働きやすい職場です」

ハノイ支店のナショナルスタッフは関係会社含め全員が女性。互いに仕事の垣根を越えてサポートし、家事や子育ても協力し合う。ナショナルスタッフである彼女の目には、外資企業であるJFE 商事はどのように映っているのか。

「ベトナムの鉄スクラップはアフリカや南米産が中心でした。ベトナムJFE 商事は、良質な日本製品を仕入れるパイオニアです。街中に新設される橋やビルを見ていると、自分



の仕入れた原料が自国に貢献していると誇りを感じます。マーケットはまだまだ広がっています。もっと開拓するつもりです」

挑戦心の強いクインには、将来成し遂げたいことがある。「現在は原材料を仕入れる仕事ですが、いつかベトナムに技術力を売り込む仕事をしたいです。発展途上にあるベトナムの製鋼メーカーは、建材などが主要販売製品です。長年培われたJFEの技術力を提供すれば、さらに高品質・高機能な製品を生産できるようになります。そうしてベトナムの産業がもっと広がるためにも、両国の関係者と親しい関係を築きながら、経験を積み重ねていきたいです」。

国際競争を 勝ち抜くために、 ナショナルスタッフは 欠かせない。

ベトナムJFE 商事ハノイ支店
支店長（当時）

住吉 功



拡大するアジア市場では、ナショナルスタッフの力が不可欠です。現地企業との競争においては、現地の人にはできないコミュニケーションが強みになります。打ち合わせでは、文化や言語を理解して初めて相手の本音を引き出せます。議事録や契約書では伝わらない、相手の表情や会話に表れる微妙な心情をくみ取った上で、日系企業の情報力や品質でさらに差をつけ、受注につなげることができるのです。

一方で、ナショナルスタッフには日本の商習慣もきちんと理解してもらわなければなりません。ベトナムに比べ日本では、長期的にじっくりと物事を進める傾向が強い。彼女たちには、やや形式的に感じられるかもしれませんが、プロセスの重要性を意識してもらるように努めています。

コミュニケーションが得意なクインには、個性を活かせるようにサポートしています。また、総合的な商談能力を高め

てもらうため、専門の鉄スクラップ以外の原材料や鉄鋼製品にも挑戦させています。成長の進むベトナム社会では、若者のキャリアアップ志向が非常に強いのです。着実にスキルを高め、成果に対してやりがいを感じられるような職場づくりを心掛けています。私にとっても、駐在先であるベトナムの発展がやりがいです。現地スタッフがもっと活躍できるよう、ビジネスを拡大していきたいです。



チームワークで挑む プロジェクト推進

JFE エンジニアリング
ヤンゴンごみ焼却発電プラントプロジェクト
プロジェクトマネージャー

大山 努

結 束。

新たなプロジェクトを完遂させるのは、
国境を越える結束力。

ミャンマー史上初の挑戦 ごみ焼却発電プラントの建設

ミャンマー最大の都市・ヤンゴン。急速な経済成長の途上にあるこの街では、増加するごみと慢性的な電力不足が深刻な社会問題となっている。その課題に立ち向かうのが、大山努を中心としたプロジェクトチームだ。大山は語る。

「JFE エンジニアリングには、国内でのごみ焼却発電プラント建設や、ミャンマーで手掛けてきた事業で、多くの実績があります。そのおかげで、今回ヤンゴン市から相談を受けることができました。信頼を裏切るわけにはいきません」



プロジェクトマネージャーに抜擢された大山は、ミャンマー国内で初となるごみ焼却発電プラントの計画に着手した。年間約5,200MWhを発電し、約2,400トンのCO₂削減を可能にするプラント建設計画は、現地のネットワークを生かした調査力とJFEの技術力を結集した賜物だ。

「最大の壁は、約20億円におよぶ建設費用です。これは、ヤンゴン市の予算だけでは賄いきれない数字。日本の環境省とミャンマー中央政府からも支援を受ける必要があります。2カ国間を何度も行き来し、プラント建設の意義を説明しました」

2年間におよぶ渉外活動の末、ミャンマー政府から特別国家予算を獲得。竣工に向け、プロジェクトが始動した。

互いを尊重する信頼関係が チームを成長させてきた

大山を支えるプロジェクトチームは、設計、調達、建設など、現地に駐在する各部門の専門家で構成される。さらに、日本国内のスタッフや、経験豊富なOBスタッフがバックアップ。前例のないプロジェクトに臨むため、総力を結集して万全の体制を整えた。

「ナショナルスタッフはプロジェクト始動時に採用しました。

PROFILE

おおやま つとむ
JFE エンジニアリング 都市環境本部海外事業部。2002年入社。2015年10月、ヤンゴンごみ焼却発電プラントプロジェクトでプロジェクトマネージャーに就任。

このプロジェクトチームで 全力を尽くす

JFE エンジニアリング
ヤンゴンごみ焼却発電プラントプロジェクト
ナショナルスタッフ



ミョー ミン
Myo Min

インジン コ コ
Ingyin Ko Ko

ニョー イー タン
Nyo Yi Thant

スエ ジン タン
Swe Zin Thant

技術スタッフであるわれわれに対し、大山さんは書類やスケジュールの管理、ビジネスマナーなど、基本的なことを親身に指導してくれました。また、頻繁にミーティングを開き、それぞれの抱える問題をチーム全体で共有。私たちが一つのアイデアに固執してしまうのに対し、大山さんは常に複数のアイデアを提案して柔軟に解決に導いてくれます。ミャンマーでは、トップダウン式のビジネスが主流で、現場が閉鎖的な空気にな

ってしまうことが多いのですが、JFEのスタッフは、私たちに裁量を与え、一緒に仕事をしていくスタイルなので、やりがいを持って働くことができています。

何よりの喜びは、プロジェクトを通じてミャンマーの発展に貢献できること。プラントの完成によりヤンゴンの街並みが美しくなるのも楽しみです。インフラ整備の領域で、より大きな仕事ができるよう、彼のようなプロジェクトマネージャーを目指してスキルを高めていきます。

